2020年『ベスト経済書』

THE BEST BOOKS 2020 IN ECONOMICS

経済学者・経営学者・エコノミスト111人が選んだ

Special Feature 2

特集2

コロナ禍に翻弄された2020年のベスト経済書のランキングの顔触れは、エビデンス（科学的根拠）に基づく事実を提示する本が目立ったここ数年の傾向とは違うものになった。基本を改めて捉え直す本が上位に入った。加えて、主要な先進国で進む格差拡大など曲がり角にある資本主義の在り方を捉えた本もランクインした。

ダイヤモンド編集部・竹田孝洋

Toshiaki Usami

2020年『ベスト経済書』ランキング ベスト10

順位	書籍名	著者名	出版社名●本体価格	電子版あり	得点
1	世界標準の経営理論	入山章栄 著	ダイヤモンド社●2,900円	○	121
2	経済学を味わう 東大1、2年生に大人気の授業	市村英彦、岡崎哲二、佐藤泰裕、松井彰彦 編	日本評論社●1,800円	○	77
3	スティグリッツ PROGRESSIVE CAPITALISM	ジョセフ・E・スティグリッツ 著	東洋経済新報社●2,400円	○	68
4	世界経済史から見た日本の成長と停滞 1868-2018	深尾京司 著	岩波書店●6,900円		66
5	16歳からのはじめてのゲーム理論 〝世の中の意思決定〟を解き明かす6.5個の物語	鎌田雄一郎 著	ダイヤモンド社●1,600円	○	61
6	日本経済のマクロ分析 低温経済のパズルを解く	鶴 光太郎、前田佐恵子、村田啓子 著	日本経済新聞出版社●3,000円	○	58
7	国家・企業・通貨 グローバリズムの不都合な未来	岩村 充 著	新潮社●1,400円	○	52
8	ブルシット・ジョブ クソどうでもいい仕事の理論	デヴィッド・グレーバー 著	岩波書店●3,700円	○	50
8	無形資産が経済を支配する 資本のない資本主義の正体	ジョナサン・ハスケル、スティアン・ウェストレイク 著	東洋経済新報社●2,800円	○	50
10	資本主義の新しい形	諸富 徹 著	岩波書店●2,600円		40

アンケート調査の方法

- 全国主要大学の経済学者、経営学者および民間のエコノミストにアンケートを送付し、111人から回答を得た。
- 2019年11月～20年10月の1年間に出版された経済書、経営書および関連書籍の中からベスト3を選定してもらい、1位10点、2位6点、3位3点を付与し、総合得点を集計した。

データ分析による因果関係の実証から基本への回帰。2020年のベスト経済書の上位の顔触れを見ると、ここ数年と傾向が変化したことが見て取れる。

EBPM（エビデンスに基づく政策立案）が重要視される中、昨年までは、データに基づいてこれまでの通説を検証する趣旨の本が数多く上位に顔を出していた。

今年は、1位、2位と教科書ともいえる書がランクインした。

入山章栄・早稲田大学教授が書いた『世界標準の経営理論』が今年の1位。経営学は、経済学、心理学、社会学の理論を借りて構成されている。これまで、その三つの分野にまたがる経営学の内容を網羅的に扱った書はなかった。

そこで、入山教授自身が全体を俯瞰した教科書として著した。この本を読むことで、自らが置く事業について考察する上での思考の軸を得ることができ、その軸をもって他分野のビジネスについても議論をすることができるようになることを狙いとしている。

2位に入った『経済学を味わう 東大1、2年生に大人気の授業』は、文字通り、東京大学の授業を基にしたものである。ただ、通常の経済学の入門書や教科書とは違い、基礎的な部分のみを解説しているものではない。マクロ経済学、ミクロ経済学、開発経済学、経済史など各分野の最先端の動きを分かりやすく扱っている。

20年はコロナ禍に見舞われた。人と接する機会が減り、独り自らを省みたり、思索する時間が増えたことで、基本を見つめ直そうとする人が増えたことが、両書を上位に押し上げたといえるだろう。基本を説く書という意味では、5位に入った鎌田雄一郎・米カリフォルニア大学バークレー校助教授の『16歳からのはじめてのゲーム理論』も同じ系譜にある。

ジョセフ・E・スティグリッツ・コロンビア大学教授の『スティグリッツPROGRESSIVE CAPITALISM』が3位に入った。現在の米国における分断や格差拡大、グローバル化の弊害などを指摘している。多かれ少なかれ、主要国は同様の状況に置かれつつある。曲がり角にある資本主義の状況を捉えている。日本にとっても示唆に富む書であるといえる。

BEST 2

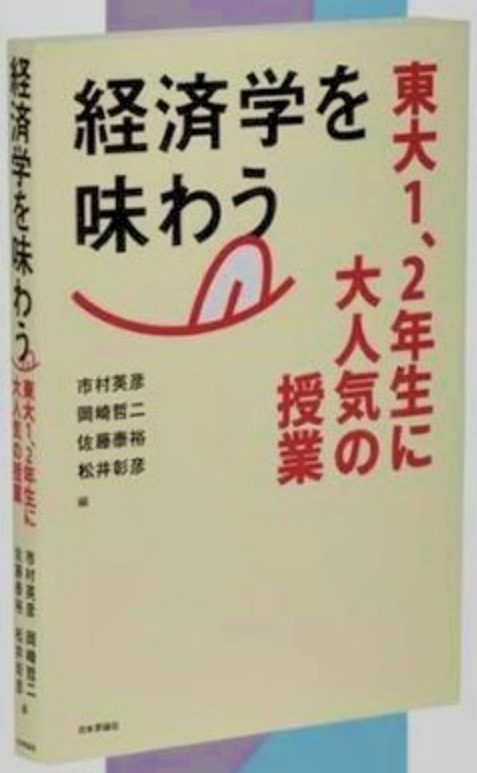
先端的なテーマを分かりやすく伝える

経済学を味わう

東大1、2年生に大人気の授業

市村英彦、岡崎哲二、佐藤泰裕、松井彰彦 編

●日本評論社 ●1800円（本体価格）



T.U.

77点

この本は東京大学での授業を基にして書かれた本だ。その授業名は「現代経済理論」。駒場キャンパスの教養学部の1・2年生向けの授業で、対象は経済学部に進学する学生だけではなくて、理科系も含めた全ての学生だ。

この授業は、2019年度に始めた。なぜ始めたのか。

東大は、教養学部2年間、そして専門の学部2年間という仕組みになっている。専門を勉強する期間が2年と短い。その上3年生になって経済学部に入ったときには、学生の視野に就職が入ってきて、落ち着いて経済学を勉強する期間があまりないと考えていた。1・2年生の教養学部の時から経済学を勉強してほしかった。

また、2年生の後期に経済学の授業はあるのだが、進む専門の学部が決まる夏以降のため、経済学部に進む学生だけが受ける授業になっている。幅広い学生に経済学の面白さを分かってもらい、経済学部に行ってみようと思ってもらうことが十分にできていない状態にあった。それで前期に1・2年生対象の授業をつくろうということになった。

いざ始めると、多くの学生が授業を受けてくれた。19年度は500人前後、20年度に至っては約1000人だ。

経済学の入門編というと、教科書に書いてある初等的なことを話すのが、オーソドックスなやり方だと思うが、この授業ではあえて先端的なテーマを分かりやすく話すことを心掛けた。かなり面白いものになったと自負している。少しでも多くの人に読んで経済学に興味を持ってもらいたいと考え、書籍化したのが本書である。

本にするに当たっては、取り上げたそれぞれの項目をさらに勉強していくための参考文献を章ごとに追加した。

また、授業では話さなかった点だが、この本を読んだ後経済学を勉強していくにはどうしたらいいかをあとがきに記した。

本書を読むに当たってはどの章から読んでも差し支えない。最初の方に理論的な章があって、後の方に実証的な章、応用的な章があるが、理論篇を読んでからでないと実証的な章が理解できないという構成にはなっていない。

経済学部を卒業されたビジネスマンの方の多くは、教科書的な経済学を理解されているのではと思う。そういう方に、大学を卒業した後経済学はこんなに発展して、面白いことが分かってきているといったことをこの本を通じて知ってほしい。

ミクロデータを計量経済学の手法を使って分析し因果関係を特定していく実証研究が、ここ20年ほどで著しく発展している。4番目の実証ミクロ経済学、5番目の計量経済学、9番目の開発経済学、10番目の経済史を読んでいただけると、そういったことを実感してもらえるのではないか。（談）

Masato Kato

おかざき・てつじ／東京大学大学院経済学研究科教授。1981年東京大学卒業、86年東京大学大学院経済学研究科博士課程修了（経済学博士）。99年より現職。

推薦の言葉

●東京大学での1・2年生対象の経済学の大人気授業を書籍化したものである。第一線の研究者たちが、東大の教養学部から各専門学部への進学の際に、優秀な学生に経済学部に来てもらうという目的を持って、全力で経済学の魅力を伝えている（大竹文雄・大阪大学教授）

●現代の経済学が取り扱うトピック、分析方法が網羅的に取り上げられており、経済学を初めて学ぶ者に強い関心を抱かせる。経済学を教える教員にも「このような授業をしてみたい」と思わせる魅力がある（高橋 聖・東海大学准教授）

●最近の経済学のトレンドが分かる。マクロ経済学が1章のみで、ほぼ全部の章で実証分析に触れていることが時流を表している（蓮見 亮・武蔵大学准教授）